

# 子どもの思いを生かす表現活動をめざして

～生活の中に生きる図画工作・美術科教育～

図画工作・美術科研究会議

高橋 花子<sup>1</sup>

水戸 寿子<sup>2</sup>

宮川 裕子<sup>3</sup>

浦海 民江<sup>4</sup>

## 要 約

豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を図ることをねらいとした今回の学習指導要領の中で、図画工作・美術科教育で目指しているものは、子どもが自分の思いを生かし、自分の思いを実現させていく過程を大切に、思い通りの作品ができ、喜びとともに充実感と満足感、自分への自信が得られ、自己実現へとつなげることである。

しかし「対象をどうとらえるのか」「自分は何をどう表現したいのか」「その中で自分は何を伝えたいのか」そんな「思い」をもてないと、子どもの表現意欲は低下してしまうと考えられる。特に思春期といわれる年代は、他者を意識したり、自分の思いに自信がもてなくなったりして、自分の思いを表現することを避け、苦手意識をもったり、意欲の減退を招いたりする子どもが増えると言われている。(ローエンフェルド発達段階説より)

そこで本研究会議は、思春期の子どもに焦点をあて、子どもの「思い」をひき出し、それを生かす表現活動の指導のあり方について、研究を進めることにした。そのために、「思い」をひき出しやすい題材として、生活の中で生かしていける題材を取り上げる。「思い」を膨らませるために、鑑賞や素材体験を取り入れた導入をおこなう。子どもが、自分の「思い」をひき出し、はぐくみ、制作を支え、制作の軌跡を自ら確認していくことができるような学習ノートを活用する。以上の3点に着目し、研究を行った。

子どもの「思い」を、4つの視点をもとに検証授業を行う中で、身近な生活経験とかかわる題材の必然性や、思いをひき出すための導入としての鑑賞や素材体験の必然性、学習ノートの活用法やあり方が、とらえられた。その結果、子どもの思いを生かす表現活動を行うためには、発達段階に応じた授業の環境作りと、教師の意図的支援によって子どもの「思い」をひき出すことが大切であることが明らかになった。

キーワード：子どもの思い、思春期、生活の中からの題材、導入時の鑑賞、素材体験、  
学習ノートの活用

目 次			
主題設定の理由	86	? 検証授業 1	91
? 学習指導要領から	86	? 検証授業 2	92
? 子どもの状況から	86	? 検証授業 3	94
? 本研究会議より	87	? 検証授業 4	96
研究の内容	88	研究のまとめ	98
? 研究の対象範囲	88	? 研究の成果	98
? 子どもの思い	88	? 「思い」をひき出す題材	98
? 仮説	89	? 鑑賞や素材体験を取り入れた導入	98
? 研究の方法	89	? 「思い」をひき出し、はぐくみ、 制作を支える学習ノートの活用	99
? 「思い」をひき出す題材	89	? 今後の課題	99
? 鑑賞や素材体験を取り入れた導入	89	参考文献	100
? 「思い」をひき出し、はぐくみ、 制作を支える学習ノートの活用	90	指導助言者	100
? 検証授業	91		

<sup>1</sup>川崎市立長沢中学校教諭(長期研修員)

<sup>2</sup>川崎市立王禅寺中学校教諭(研修員)

<sup>3</sup>川崎市立三田小学校教諭(研修員)

<sup>4</sup>川崎市立西梶ヶ谷小学校教諭(研修員)

## 主題設定の理由

### ? 学習指導要領から

豊かな人間性や、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を図ることを基本的なねらいとした今回の学習指導要領の中で、図画工作・美術科で目指しているものは、小学校では「児童は、自分の思いや願いを絵にしたり、形に表したりする人としての根源的な表現の欲求をもっている。この欲求を満足させ、表現の喜びを味わわせるようにすること」<sup>1)</sup> 中学校では「生徒の自己実現を図り、生涯にわたり愛好していく心情とその資質や基礎的能力を育成すること」<sup>2)</sup>とされている。つまり、望ましい人間形成のため、人が本来もっている表現欲求・生活に必要なものなどを創意工夫して作りだしたいという欲求を、自己実現への喜びへと導くことが含まれている。

自分の「思い」を表現することで、「自己実現」「生きる力」の喜びを味わうためには、自分の「思い」を認識することが必要である。自分が何を思い、何を表現したいか、またそれをどのように表現したいのかを確認していく。そして、それを主体的に創造活動を行うことで実現していくことが、成就感や自己有効感を感じさせることになり、自己実現の喜びにもつながるのである。そのためには、まず子どもの「思い」をひき出し、はぐくみ、支え、深めていくことが大切であると考えている。

### ? 子どもの状況から

ベネッセの第3回学習基本調査(2001年調査)によると、小学校では83.6%の子どもが好きな教科1位にあげている図画工作だが、中学校の美術科では49.3%と2位に後退していく。好きであったはずの図画工作を、好きでなくなったり、苦手意識をもったりと、子どもが変わってきていると考えられる。

実際、授業中に、「自分は何を表現したらいいかわからない」「思うように表現できない」「めんどくさい」「とにかく形になればいい」「どうすれば成績が上がるのだろう」という子どもの言葉を聞くことがある。自分自身の「思い」よりも、教師や保護者、友達など他者からの評価が気になってしまい、それに振り回され自分の存在が薄くなってしまふ。あるいは、前向きに取り組めないまま、与えられた課題として作品を制作したり、自分の「思い」がつかめずイメージを具現化できなかったり、興味・関心を抱けず制作に対して無気力になってしまったりしている。そのため、制作活動や作品に対して愛着をもちにくく、制作を通して満足することも難しくなっている。つまり、自分自身の表現活動に自信や意欲をもてず、苦手意識を抱き図画工作・美術への愛好心をもつことができないのである。

文部科学省初等中等教育局視学官遠藤友麗は、「全国の中学生対象の美術の諸調査の結果、子どもの苦手意識の理由は、思い通りに表現できる技能をもっていないが最も多く、次いで、何をどのように表現すればよいかかわからないという感性や発想・構想、構成力の乏しさである」<sup>3)</sup>と述べ、技能的部分と、自分の「思い」が見つからない内面的な部分を苦手意識の要因としてあげている。

また、小学校高学年から中学生にかけては、客観的なものの見方や、新しい価値観に気付き始めるが、精神的には不安定になりやすい思春期に入る。このような思春期を向かえた子どもたちに、発達段階を踏まえ、自分の「思い」を具現化することができるための有効な手だてを考える必要がある。

<sup>1)</sup> 文部省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』日本文教出版 2001年 p.7

<sup>2)</sup> 文部省『中学校学習指導要領解説 美術編』開隆堂出版 1998年 p.7

<sup>3)</sup> 遠藤友麗編著『中学校学習指導要領の展開 美術編』明治図書 1999年 p.21

## ？ 本研究会議より

川崎市総合教育センターの平成14年度研究の総括主題は「川崎の特色が生きる教育の創造」であり、「自ら学ぶ・共に学ぶ・学び続ける」のキーワードをうけ、本研究会議では「自ら学ぶ」為にも、「子どもの思い」を第一に考え、子どもが「自分の思い」に気付き、その「思い」を形に表し、愛着と自信をもって制作に取り組み、「自分の思い」を生かした表現活動ができる資質・能力をはぐくむことが、主体的な学習者となり自己実現や自分らしい生き方を実現していくことにつながると考えた。

子どもたちには、「思い」となるものがないわけではない。子ども自身もはっきり気付いていない「思い」に制作活動を通して気付き、教師の支援を得て、本来もっている表現の欲求を満たしていくことが、創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てることにつながり、自己実現へ近づき、自ら学び・自ら考える力などの「生きる力」の育成へとつながると考えた。(図1)

以上のことから、そのための指導法を研究する必要性を感じ、研究主題を次のように設定した。

### 「子どもの思いを生かす 表現活動をめざして」

子どもの「思い」は日常生活に密接に関係している。子どもを取り巻く環境や生活の中で出会う様々な体験・経験によって無意識のうちにはぐくまれる感性が、子どもの表現活動の動機や発想・構想のもとになると考えた。

さらに、生活の中で役立てたり、使うことを目的とした作品を制作することは、今まで生きてきた生活文化を考えるきっかけになると同時に、大人になっても身の回りの美術・造形に積極的に関わる「学び続ける」力を育てていくと考えた。

そのことは、市川伸一の「学習動機の一要因モデル」<sup>4)</sup>でも、生活にかかわる題材は、自分の将来の仕事や生活に生かせる実用志向の動機付けになり、学習意欲をひき出すものと考えている。

つまり、生活と図画工作・美術科との密接な関係に気付き、生活の中に生きるものを制作することは、表現の欲求につながる思いをひき出し、生かし、はぐくむと考え、副題を次のように設定した。

### ～生活の中に生きる 図画工作・美術科教育～

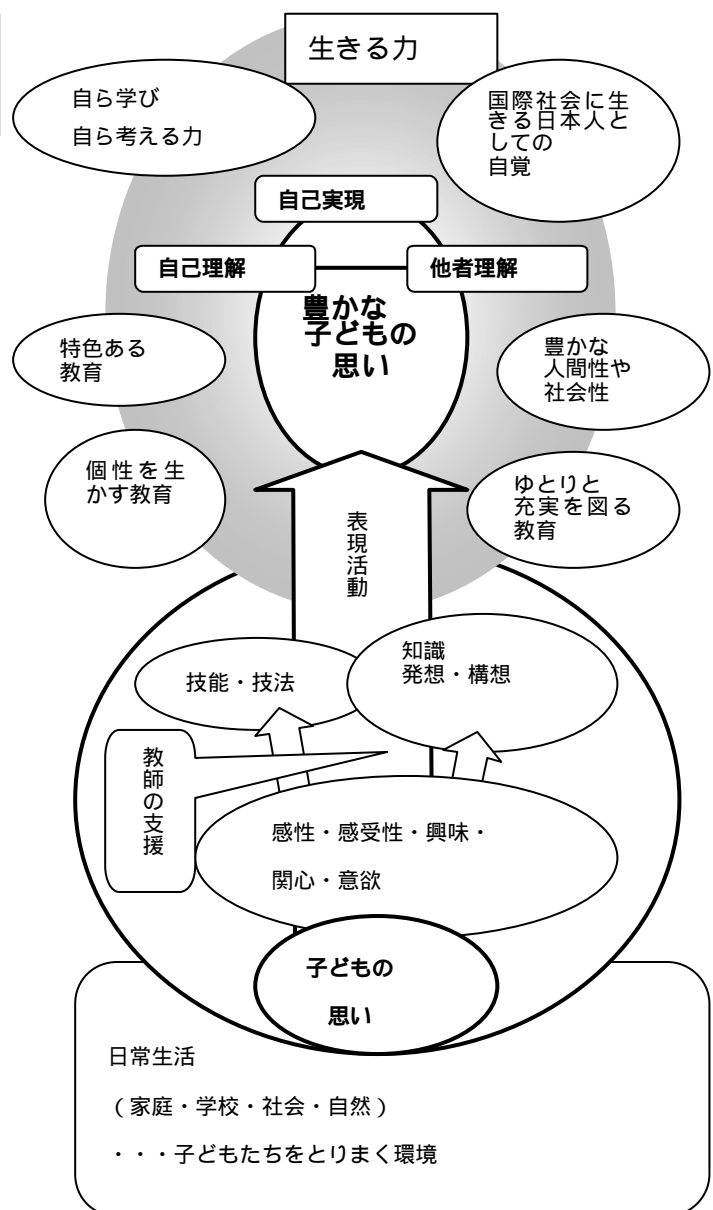


図1 本研究における、子どもの思いと生きる力の関係図

4) 市川伸一『学ぶ意欲の心理学』PHP新書

# 研究の内容

## 1. 研究の対象範囲

本研究会議では、研究対象を小学校高学年・中学生とした。ローエンフェルドの発達段階説でいう、「写実主義的傾向の芽生え」「擬似写実的段階」「決定の時期」の子どもたちである。(図2)

一般的に思春期と呼ばれる時期に重なるこの段階は、美術教育においても、発達段階として重要な時期である。なぜならば、前述の通り小学校高学年から中学校段階になると、苦手意識や自己表現に迷いが見られることが多くなる。こうした現象について、ローエンフェルドは、『身体の生理的变化に伴って、創造活動が無意識的なものから批判的意識的なものへと導かれるこの創造活動の変化は、青年期の危機の最も重要な特徴の1つである』<sup>5)</sup>とし、このような青年期の危機に対して創造活動に対する批判的意識のマイナスの作用を最小限に抑え、子どもの自信の喪失を防ぐことが重要であると主張している。

思春期の子どもたちの表現活動では、自我が芽生え客観的なものの見方や論理的な思考能力が高まり、課題追究力や忍耐力や新しい価値観への気付きなどが見られる。一方、自己実現をめざしながらも、自分をつかみきれなかったり、表現意図とそれを具体化する表現技能のバランスがとれていなかったり、他人、特に大人に対して、本音を出すことにためらいを感じ、自分らしい表現が抑制されることもある。しかも、遠藤友麗も述べているように、この時期は生涯の表現活動に大きく影響を与えるものであり、大人になっても中学生の時期の苦手意識は、残ってしまうことがある。自分を見つめることができるようになる思春期の時期にこそ、自分の「思い」をはぐくみ無理なくひき出し、支え、深めていける発達段階に応じた指導が重要なのではないかと考えた。

## 2. 子どもの思い

子どもの「思い」とは、日常生活の中で様々なかわりを通して、無意識のうちに獲得し、蓄積されたものが、他者や外界、教育によって意識化し具体化した「思い」に育つと考えられる。自分の表現欲求の思いが自己確認できていると、自分にとって必要な情報を自己選択し、表現として発信していくことで自己実現へとつなげていけると考えた。また、学習指導要領で示されている「表現及び鑑賞の活動を通じてつくりだす喜びを味わうようにする」ためにも、「思い」を大切にしたい授業を展開することにより、子どもが主体的・個性的に自己を発揮できるようにすることが必要である。そして、無意識のうちにはぐくまれた思いを意識的表現活動へ導くには、意図的・計画的な指導が重要になる。

本研究会議では、子どもの「思い」を「おもしろそう」「やってみよう」という題材に対する興味・関心・意欲から、「こんな風に表現したい、つくりたい」という表現意図まで幅広くとらえた。表現意図は、不変的なものではなく、変化・成長していくものであると考え、次の4つの視点からとらえることにした。「題材をどのようにとらえるのか」という題材への興味・関心・意欲としての思い。

「何を表現したいのか・つくりたいのか」という着想・発想としての思い。とはまだ漠然とした思いである。「どのように表現するのか・つくるのか」という具体的な構想としての思い。これは表現力を伴う思いであり、表現技能のバランスとの関係がかかわってくる。「満足のいく活動が

6) 決定の時期(13~17歳) 青年期の危機 視覚型・触覚型・中間型
5) 擬似写実的段階(11~13歳) 推理の段階・感覚の2分化(視覚的・主観的)
4) 写実主義的傾向の芽生え(9~11歳)
3) 様式化の段階(7~9歳)形態概念の成立
2) 様式化前の段階(4~7歳)再現への最初の試み
1) なぐり描きの段階(2~4歳)自己表現の最初の段階

図2 ローエンフェルドの発達段階説

<sup>5)</sup> ローエンフェルド 『美術による人間形成』 黎明書房 1963年 p.275

できているのか」という活動に対しての自己の満足感，達成感であり，次の活動への意欲につながる思いであり、自己評価にもつながる思いである。

これらの「思い」が豊かに深まり，子どもが作品にこだわりをもち，愛着を抱き，自分の作品を顧みることができるようになっていけば，より広い視野で様々な情報や支援を創造活動や鑑賞活動に生かしていくことができる。さらに，自分の思いを明確にすることができたならば，必要な情報を入れ替えたり，新たな情報を取り込んだりと，自己選択しながら自分なりの新しい形へと発展し，感性の豊かさや，豊かな情操を養っていくことになるであろうと考えた。

### 3．仮説

子どもの「思い」を，「題材をどのようにとらえるのか」「何を表現したいのか・つくりたいのか」「どのように表現するのか・つくるのか」「満足のいく活動ができているのか」の4つの視点からとらえ，子どもの「思い」を無理なくひき出し表現させることができたなら，自分への自信が生まれ，意欲的に表現活動に取り組むことができ，美術を愛好する心情が育つとともによりよい自己実現へつなげていけると考え，次の仮説を設定し，そのための指導法の研究を進めていくこととした。

**子どもが自分の「思い」を深めていくことにより，  
自己実現に向けた表現活動を行うことができる**

### 4．研究の方法

子どもの思いをひき出し，はぐくみ，深めていくにはどのような指導が効果的かについて，次の3点に着目し研究を行った。

#### (1)「思い」をひき出す題材

子どもの思いをよりひき出すための題材として，制作の目的や条件のはっきりした，デザイン・工芸を取り上げることにした。

研究対象とした小学校高学年から中学生は，子どもが大人への過渡期にある思春期に入る時期であり，子どもは，自分の内面をあからさまに親や教師の前に示すことが少なくなる。それは，この時期の子どもにとってごく自然なことである。心象表現は自分の内面をさらけ出すことであり，そのことに警戒心をいだき，苦手意識が強くなってくるのも，ごく自然なことである。つまり，この時期の子ども達の心は，自分や友達との葛藤，教師や親との摩擦など，心理的要因が多くを占めており，色や形やテクスチャー（材料の持つ地肌）を伴った造形的な心象表現に結びつけにくい。心象表現は抵抗感の強い領域であり，単に技能的な問題だけでなく，「何を」「どのように」表現するかの「思い」を形成しにくいのである。

それに対して，デザインや工芸は，制作の目的や条件をはじめ客観的な枠組みがはっきりしており，「何を」「どのように」工夫したりするべきかつかみやすい。また，身近な生活の中で生かしていける題材は，作品を作るだけでなく，使い，役立てることができ，作品に親しみと愛着を持つことができる。さらに，用途や制作者の思いを知ることにより，自分の生活を支えている文化を感じ，「思い」を生かす表現活動ができるのではないだろうかと考えた。

#### (2)鑑賞や素材体験を取り入れた導入

思いをひき出すためには，授業の導入は重要になる。そこで，子どもの意識付けや様々な気付を生む鑑賞や素材体験を取り入れることにした。

子どもの様々な「思い」は、子どもが生きてきた生活の中での環境や体験や経験を基に生まれてくる。それらは個々に異なり、子どもたちの環境の違いや現代の生活様式の多様化により、先人の残した文化についての経験も大きく異なっている。子どもたちが、各自の「思い」をひき出したり広げたりするためには、先人の制作した作品をいろいろな角度から鑑賞したり、素材のもっている可能性を簡単な体験を通して理解することなどを通して、自分の興味・関心を高めると同時に、制作意欲を高めることにつながると考えている。また、その中で、自己の制作に対する「思い」を膨らませることにつながり、その「思い」を具現化していくことが子どもの成長にとって意義のあるものになるのではないかと考えている。さらに、作者の生きざまなどの様々な情報を与えることにより、より「思い」を膨らませ、文化・人間への理解を深めることへとつながっていくと考えている。このように、様々な子どもの意識付けや、様々な気付きを生む鑑賞や素材体験などを含めた導入が効果的であると考えた。また、素材体験に関しては、基礎的技能の修得も関係し、心おきなく自らの手で試し体感して学ぶことも大切だと考えている。

### (3) 「思い」をひき出し、はぐくみ、制作を支える学習ノートの活用

思いをひき出し、継続的に制作を支えていくために学習のノートの活用を工夫することにした。

子どもの「思い」をどのようにひき出し、はぐくみ、制作を支えていくか、またどのようにとらえていくかを考えたとき、授業数が縮減されているなかでは時間をじっくりかけていくことは難しい。そこで、教師と子どもがコミュニケーションをとりながら子ども自身が自分の「思い」をひき出し、はぐくみ、制作のアイデアを支え、制作の見通しをもち、さらには自己の思考の経緯を振り返ることのできるような手がかりや、記録となるような学習ノートが効果的ではないかと考えた。

以上の3つの点に着目し、「思いの4つの視点」を関連付けながら、「思いの成長（発展プロセス）」として授業展開を構想し、検証授業を行った。（図3）

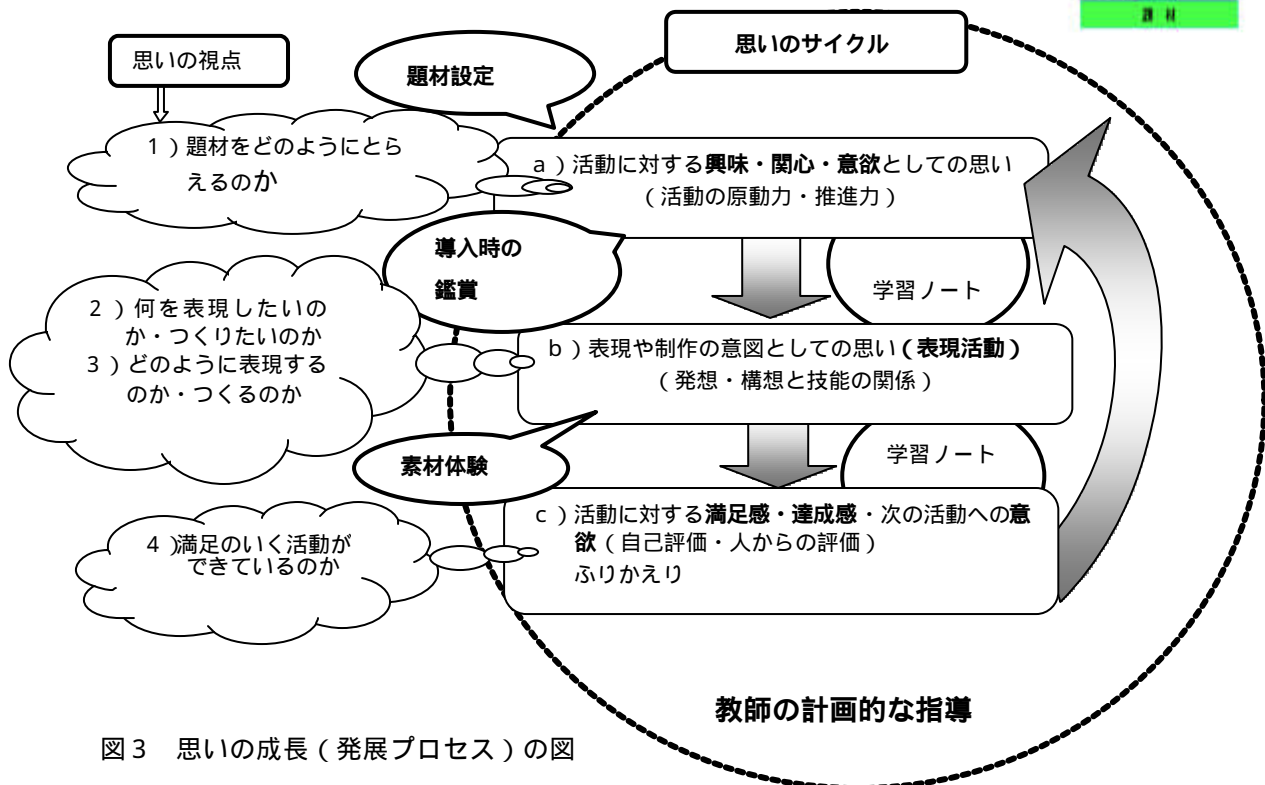
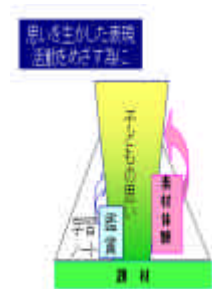


図3 思いの成長（発展プロセス）の図



## 5 . 検証授業

### 題材名と検証一覧

検証授業 1	「思い」をひき出す題材 「ぬくもりを感じる湯のみ～清水焼きの絵付け～」 中学3年（3時間）
検証授業 2	鑑賞や素材体験を取り入れた導入 「オリジナル ライト」 小学6年（6時間）
検証授業 3	「思い」をひき出し、はぐくみ、制作を支える学習ノートの活用 「ぼく、私の版画 World」 小学6年（7時間）
検証授業 4	「思い」をひき出す題材 「あっ」という瞬間 中学3年（8時間）

検証授業を行うにあたって着目児を決め「思いの4つの視点」をもとに考察した。着目児については、日常の授業の中で自分の「思い」を表現するまでにつなげることが難しい子どもと、比較的自分の「思い」を具体的にイメージし、表現するまでにつなげることができる子どもを考えた。

#### ？ 検証授業 1（「思い」をひき出す題材）

「ぬくもりを感じる湯のみ～清水焼きの絵付け～」 中学3年（3時間）

= 題材に対する「思い」と、自分の表現活動への「思い」を探る =

生活工芸品や日本の伝統工芸について親しみをもった上で、自分の思い・用途・使用者に対する思いやりなどをふまえた湯飲みのデザインをする題材である。修学旅行の体験学習としてのプログラムを、美術科としてとして取り入れ、最初の1時間は校内で下絵を考え、その後現地で90分間絵付けを行った。後日、業者が焼き上げた作品を学校へ納品する。



	着目児A	着目児B
子どもの日常の授業の様子 (担当教諭)	アイディアスケッチなど白紙で終わりがちなことが多く、周りの子どもの言葉や行動に影響されやすい	発言も多く、友達にアドバイスもしている。集中して作業を進める
誰のため どんなイメージで(学習ノート)	自分の湯のみ(皆もっているから)白紙	自分の(もっていないから)のほほんとした感じ
制作中のイメージ(スケッチ)	落ち着いた感じ・植物・コスモス	レタリング・動物・連続性

#### 活動の様子

	着目児A	着目児B
導入	話をただ聞いているときは飽きている様子で、鑑賞に入ると、質問に手を挙げ反応はしているが、 <b>きよろきよあたりを回りを見渡している。</b>	手を挙げ、鑑賞も最前列で見ている。 <b>お気に入りを発表。</b> 「相撲の力士の図柄が男っぽくて、ユーモアもあっていいと思います」と、鑑賞の作品について感想を述べる。
展開	何をどう表現していいか迷い、友達の作品を見て真似をしたり、資料を探しに行ったりと、教室内をうろうろしている。 教師の「 <b>どんなイメージの湯飲みにしたいの？</b> 」と個人的に声をかけると、「 <b>日本風らしく、落ち着いたイメージを表現したい。植物でいうとコスモスを描きたい</b> 」と、自分の思いを声に出して確認できた。 自分で資料を探し、集中してスケッチに入ることができた。 (現地) <b>下絵を裏にして</b> もくもくと筆を動かしていた。	何度かアイディアスケッチを描いては消していた。(レタリングの[男]・動物)他人の様子も気になり、見に行っている。  自分の「思い」が2匹の犬に決まると、資料を用意し、周りの状況に関係なく集中し、描き出した。 最後は記録しているビデオに向かって絵を自ら見せ、自信と満足感を得ることができた。  (現地) <b>下絵を友達に見せ</b> 、自信をもって制作に入る。 図案に「 <b>なにみてんだよう</b> 」と吹き出しをつけようとしたが、教師の「 <b>かわいいイメージがかわったなあ</b> 」という声かけで、吹き出しをやめ、絵だけで仕上げた。
まとめ	開封時には、 <b>自分の作品を一度見るとすぐにしまってしまった。</b> 作品自体には満足しているようだが、自信をもって見せ合うまでは行かなかったようである。	開封時には、 <b>友達と互いに見せ合い</b> 、出来栄には満足しているようである。

「思い」の視点	着目児 A	着目児 B
1) 題材をどのようにとらえるのか	湯飲みのいいところは落ち着く・マグカップとは違う味がする。(学習ノートより)	模様はなくても渋い感じ・日本的・和風の感じという漠然とした「思い」はあるが、日常の中では、熱い日本茶を飲むことも少なく、取っ手のあるマグカップが主流で、湯呑みをあまり使っていない。(学習ノート・発表より)
2) 何を表現したいのか・つくりたいのか	自分用に湯飲みのイメージ(落ち着いた)を生かしたモチーフを考えていた。(会話より)	自分用に、自分の興味・関心のあるものを「自分のもの」として図案に組み入れていた。
3) どのように表現するのか・つくるのか	他人の視線、言葉を意識し、本当はこうしたいけど何か言われるのではないかと、自分を出し切れないでいた。教師の言葉かけで、「思い」を言葉に出し、資料を探しはじめた。	「自分らしさ」「男らしさ」をキーワードに友達の見ながら幾つかアイデアを出し、円柱の連続性を考えた図案に落ちつき、具体的に動物をモチーフに資料を探していた。
4) 満足のいく活動ができているのか	自分の「思い」を出せず、何をどうしていいのがみえないときは、友達を見て歩いていたが、「思い」がはっきりしたときには、自分から資料を探し、夢中で自分の「思い」に向かって集中し、制作に取り組んでいた。作品自体には満足していたが、自信をもって人に見せたりするところまではいかなかった。	アイデアが出ると、他の人の作品が気になるのか、自分の作品との比較がしたいのか、立ち歩いて見聞きしていたが、「思い」がはっきりしたときには、チャイムの音や周りの声にも気がつかないほど、夢中で制作に取り組んでいた。 友達関係や性格も関係すると思うが、スケッチ・作品ともに友達や教師に自信をもって見てもらっていた。

### 検証授業 1 の考察

= 題材に対する「思い」と、自分の表現活動への「思い」を探る =

教師側は、身近にある題材として湯のみの制作を考えていたが、実際には子どもたちには身近なものではなかった。しかし、修学旅行と絡めての題材であったので、「修学旅行の記念品としてのデザイン」「自分のものとして好きな図柄をデザイン」「湯飲みのイメージからひき出したデザイン」をキーワードに子どもたちの「思い」をひき出すことができた。形が決まっている題材のため、機能・用途を工夫することはできなかったが、漠然とした自分の「思い」を具体的にイメージしていくために、考えたことや悩んだことを言葉・スケッチ・文章などで表現し、残しておくことが、自分の「思い」に気づき、ふくらませることになった。

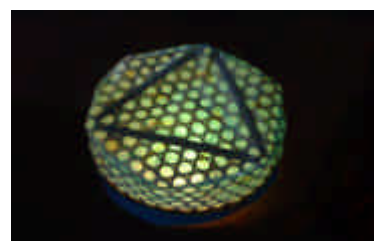
### ? 検証授業 2 (鑑賞や素材体験を取り入れた導入)

「オリジナル ライト」 小学 6 年 (6 時間)

= 導入時の発想・構想にかかわる効果的な鑑賞方法 =

= 素材体験における発想・構想の広がり、素材の可能性の追究 =

タッチライトを用いたライトをデザインする題材である。生活に根付いている明かりを、置く場所や雰囲気を考えて自分のイメージにあった明かりをデザインしてつくるため、個々の発想や構想が広がり、生活空間を美しく楽しく豊かにしていくことができるということが、実感できると考えた。また、素材体験を行うことで、その素材の可能性も追求できる。素材選びから完成した作品を自宅に持ち帰り、自分のイメージした場所において写真撮影をし、その効果を鑑賞した。



	着目児 A	着目児 B
子どもの日頃の様子 (担当教諭)	一生懸命取り組んではいるが、アイディスケッチなど描き始めるまでに、非常に時間がかかり、なかなか発想がでてこない。制作も放課後残ってやるような状況が多い子どもである。	素早くアイデアを出し、作業も早い。参考作品になることも多く、友達へのアドバイスなどもしている。好奇心が旺盛で、何事にも活発に活動する子どもである。

### 活動の様子

	着目児 A	着目児 B
導入	暗闇での鑑賞に食い入るように見つめている。間接照明の柔らかな光に自分のイメージを重ねている。集中して話を聞いている。「うわ~きれい」という感動の声があがる。	明かりを、「身の回りにあるもの」よりも、「大切な光」としてとらえて記入していた。 集中して鑑賞していた。



展開	<p>材料の準備を忘れてしまっていた。 自分と妹のもの2つ、つくりたい」(ノートより・前から心のなかで決めていたようである) T「どんな感じのイメージで作ろうと思ってる？」 C「丸い優しい感じの形」 T「優しい感じはどんな材料がいいかな？」 C「和紙の優しい感じ」 T「ヒントコーナー・おためしボックスに行ってみようか」 ヒントコーナー・おためしボックスの活用で、和紙を使うことに決定。</p> <p>T「丸い感じはどうしようか」 C「台をつけて針金で骨組みを組み立てようと思うんですけど・・・台もつけて。台はどうしよう」 T「台は板を切ったらどう」 板をもらい糸鋸で切る</p> <p>C「丸い形を針金で作るのは難しい」 T「すでにある丸い形を使うといいかも。ざるとか・・・和紙なら張子なんかもできるね」 すでに張子をやったことのある友達に聞いて教えてもらう。 学習ノートには「まだやりたい」と記入していた。</p>	<p>もってきたカップを使っての制作を考えている。 ヒントコーナーの材料を活用したり、おためしボックスも活用し、制作を進める。 いろいろためしながら制作</p> <p>自分のものと、人を見ている。</p> <p>手際よく制作を進めていた。</p> <p>学習ノートより 「何で豆電球はつくのですか」 「中の構造を調べてみよう」 「難しかったけれど、光をきれいにすることができた。次はもっとすごいものをつくってやる。張子っていうのも作ってみたい」 「意欲満々ですごいですね。明日は材料を用意して、カッコいいライトを作ってください。期待しています」</p> <p>カップの切抜きで光を演出していたが、友達のセロファン光を見て、作品を変更。</p>
まとめ	<p>授業後の学習ノートの自己評価は、一瞬迷ったが満足のところ印をつける。課題の最後には迷わず「満足」にするしをつけていた。</p>	<p>1つ目を終えると、友達のところまで話し込んでしまい、作品と向かい合うことが少なくなってしまった。2つ目は、時間内に仕上げられるよう、すばやく作り上げてた。</p>

「思い」の視点	着目児 A	着目児 B
1) 題材をどのようにとらえるのか	優しい光, カラフルな光 (学習ノート)	高速道路・オレンジやホワイトの衝突を防ぐような照明 (学習ノート)
2) 何を表現したいのか・つくりたいのか	自分の部屋と妹の部屋 (学習ノート)	小さいライトを生かし、どこにでもぱっと置くことのできるライト (学習ノート)
3) どのように表現するのか・つくるのか	黄色いふわふわした感じ・丸い優しい感じ・明るくなるように (学習ノート) 針金を使って 張子 台をつけて置く。	アイスのカップを使って セロファンを使って 5色和風ライト (学習ノート)
4) 満足のいく活動ができていたのか	はじめは悩みながら、普通よりちょっと満足のところにするしをつけていたが、最後は「満足」の欄にするしを付けた。	自己評価は常に「満足した」の欄にするしが付いている。

## 検証授業2の考察

= 導入時の発想・構想にかかわる効果的な鑑賞方法 =

暗幕を使い教室全体を暗くし、ライトの効果が感じられるように環境をつくり鑑賞した。ライトは、周りが暗いときと明るいときと二面性をもつ面白みがあるので、周りが明るい時のライト(形や色の美しさ)と暗くしたときの光の効果を、子どもたち自身で体感できるような雰囲気環境を整えた。子どもたちは、暗闇から明かりを灯したときに「お～」「きれい」等歓声を挙げ、光の美しさや間接照明としての光の美しさを感じ、ライトに対する「思い」が「どこに置くか」という単なる場所的なものから、「  
のような感じのもの」という造形的な要素の入ったものに広がっていった。授業中でも、お試しボックスで常に自分の作品を暗闇で何回も鑑賞することができていたのは、発想を広げ、自分のオリジナルなライトのイメージを確立していく上で効果があると考えられた。

= 素材体験における発想・構想の広がり素材の可能性の追究 =

素材体験は、「思い」を形に表現していくための体験である。光が様々な素材を通ることによって生じる、光の変化と美しさを自分で見つけることができ、材料を手にしてから新たな表現が生まれる子や、より自分の「思い」に合う表現へと変化していく子どももいた。ヒントコーナーやおためしボックスを活用し、教師や友達のアドバイスを受けながら、「思い」と材料・技法が思うようにかみ合ったとき、作りだす喜びを感じ、制作も意欲的になっている。指導者側もある程度素材を用意していたが、自分で用意してきた素材との関係も大きい。身近な材料や自分のお気に入りのビーズなどを利用して「思い」を広げることもあるが、自分が素材の準備を忘れていたりすると意欲が減退してしまうこともみうけられた。



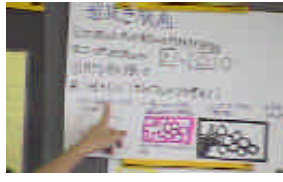
素材体験と「思い」が絡み合いながら、発想や構想が広がっていく様子が見られ、さらに素材の持つ可能性の広がりに気付くことにもつながった。

？ 検証授業3（「思い」をひき出し、はぐくみ、制作を支える学習ノートの活用）

「ぼく、私の版画 World」 小学6年（7時間）  
 = 子どもの「思い」の変化と学習ノートの活用 =  
 今までの版画の学習で得たことと、新たに挑戦する版画の技法（ステンシル・彫り進み版画・一版多色）を理解し、目的をもった作品を制作する題材である。技法や題材、大きさまでも自分で選択・決定し、版の繰り返しの面白さや、偶然の美しさも感じながらお気に入りの1作品を制作する。



授業前と後にアンケートを実施し、題材や学習ノートに対する子どもの思いの変化を探る手立てとした。学習ノートに関しては、制作の流れを確認しながらの自己評価、自分の言葉での表現を毎時ごとのコメントを記入できるようにし、鑑賞メモや資料も貼れるように冊子形式にしてみた。

	着目児A	着目児B	
子どもの日頃の様子（担当教諭）	授業への取組はきちんとできているが、事前アンケートで、「図画工作は嫌い」「生活の中で図工は役に立っていない」と答えた。	図画工作は好きだけれども、思うようにできなかったり、どうしていいか悩んでしまい、他人の作品や、やり方などが気になってしまう。	
何を作ろうか	カレンダー	版画で絵にしたい	
誰のために	祖母	自分のため	
何を表現しようか	フルーツの絵（みかん・バナナ・りんご）	植物	
どんな技法で	一版多色	一版多色	
制作の様子			
	彫り進み実演	ステンシル制作	形抜き版画手順表
授業終了後の様子	授業終了後、教科ではなく 日常活動の振り返りカードの中で、「図工は日常ではあまり使わないと思っていたけれど、こんなところで役に立って意外でした。やるじゃん図工」「今まで図工はあまり好きではありませんでした、ものを作り出す喜びがあって、だんだん図工が好きになりました」「私は版画を通して図工が好きになったので、版画は終わって欲しくありません。でも、そんなわがままも言ってもらえないので、こんどのライトアップをもっと頑張りたいです」と、明らかに変化を感じることができた。この変化の要因はある1つの事項ではなく、版画という題材、鑑賞、素材体験、学習ノートなど、様々な要因が重なったものではあると思うが、研究の一つの成果と考えたい。	版画に関して、「最初に自分が思っていた版画とは、学習を通してとても面白いというか、自分が描きたいものが生き生きと描けると言う事が分かって、好きになった」と記入していた。 検証授業の時は「やばい」「だめだ」などの言葉を連発していたが、完成後の作品との写真は満足そうな笑みを浮かべていた。 学習カードに関しても、「その日のことを書くことで、振り返ることができ、うまくいかなかったなどということが、明確になるから」と振り返りを生かし、次のステップに進んでいることがうかがえた。	

「思い」の視点	着目児A	着目児B
1) 題材をどのようにとらえるのか	版画は嫌い。失敗すると直すことができなくなるから。	版画は好き。生活画で自分が何かしているところを描くのが好き。
2) 何を表現したいのか・つくりたいか	祖母にフルーツの版画のカレンダーを一版多色で刷ってプレゼントしたい。	自分のために好きな植物の版画を一版多色でやりたい。
3) どのように表現するのか・つくるのか	フルーツの光沢を出すのが難しかったです。あとバナナの腐り加減や柿の甘さ、みかんの酸っぱさを出すのに苦労しました。これを見て「あっ、おいしそう」と思ってくれたら嬉しいです。	ひまわりをかきました。工夫したところは花びらのふちを赤でぬって一枚一枚を目立たせたことです。大変だったのは参考にしていたひまわりの絵のように花びらの枚数や位置をよりひまわりのように正確に書き上げることでした。
4) 満足のいく活動ができているのか	毎時間ごとの記録では「できた」に丸がついていた。 題材終了後のアンケートでは、「自分の作品に満足していますか」は「どちらでもない」に丸をつけているが、理由として「1作目は少し柿の部分が赤くトマトみたいになってしまったけれど、2作目は上手に出来た。」と、自分で冷静に判断していることがうかがえる。	毎時間ごとの記録では発想・構想の段階では「少しできなかった」に丸がついているが、回を追うごとに満足度が上がり、題材終了後のアンケートでは、「自分の作品に満足していますか」「している・していない・どちらでもない」の欄に「とてもしている」とわざわざ書き加えて丸をしていた。理由として、「自分の好きな花『ひまわり』を充分に表現できたから」とあった。

活動の振り返りと担当教諭のコメント（学習ノートより）

	着目児A	着目児B
鑑賞	形抜き版画はたたいた時のやさしい感じが好きです。	細かい風景が正確に表わすことができている、とても立派な教会だと思った。
み 試 よ 試 う して	丸だけを使ったんだけど、色を変えるだけで全然ちがう作品が出来ました。 （担当教諭コメント・・・とても素敵です。）	山の絵の版画を作った。自分では、山の景色を表したつもりだけどうまういかなかった。 （担当教諭コメント・・・そうかな？よくできていると思うけど、何がうまくいかなかったのかを明らかにするといいね）
1	時間がなくてステンシルしかでき無かったけれど、今度は時間を変えてもっとよい作品を作りたいです。 （担当教諭コメント・・・よい作品とは例えばどんな作品を考えていますか？自分が満足できた作品かな？）	今日の活動を振り返ると、本当は、版画で、多色でやるつもりだったけれど、時間が無かったのと、やり方がよくわからなかったのとで、一版一色にしました。 （担当教諭コメント・・・明日もう一度確認しよう）
2	「失敗は成功のもと」 彫りすすみで葉の周りに丸をつけてやったんだけど、最初にちがう部分までぬってしまっていたので、本番はこれを生かして納得のいく作品を作りたいです。 （担当教諭コメント・・・今日は納得できなかったみたいだけれど、自分でその原因を見つけてね。今日のお試しでとてもいい勉強をしましたね）	「ステンシル成功」 今日は試してステンシルをやりました。葉の形で一枚からそれぞれ違うようなものを作ろうとやったけど、色や位置が違っただけで、あまり変わりありませんでした。それでも花の模様に仕上げました。
3	「これから」 今日はアイディア（書きたいもの）はほぼ決まって、板を切るところまでできました。明日は板に絵を書き終わるくらいまでやりたいと思います。 （担当教諭コメント・・・糸のこの準備もちゃんとできていましたね。これから色使いを工夫していくのかな）	「表現したいイメージが決まった。」 今日の活動でやっと書くものが決まり、植物で、ひまわりの絵を書くことになりました。必要な材料は、家にあれば図鑑をもってきたいと思います。 （担当教諭コメント・・・決まってよかったですね。ひまわりといっても、きっとBさんの好きな色や形があるものね。イメージに合った絵になるといいね。）
4	「予定」 今日は昨日立てた予定より早く進むことができました。後は刷ってカレンダーを書くだけなので、自分の時間を使って6年間で一番最高で満足の行くものをつくりたいです。 （担当教諭コメント・・・カレンダーのイメージはもうできているのかな？）	「次回の目標」 今日の活動は先生の助言もあって、とてもじぶんのやりたい表現に近づくことができましたと思います。次回の目標は、彫り方にも工夫し、立体感をだして、よりひまわりに見えるよう努力したいです。 （担当教諭コメント・・・自分で見つけてきた図鑑でとても生き生きしたひまわりの下絵になったね。自分の描いた絵が好きになるほど思い通りの絵になるから、大切に仕上げてくださいね）
5	「ラストスパート」 今日はバナナと柿とみかんの全体を塗りました。あと、細かい部分だけなので、丁寧に塗りたいと思います。祖母にあげるから、祖母が喜ぶようにいままでの力を出し切って頑張りたいと思います。	「もうすこし」 今日は彫りを進めました。しかし、すべて終わることはできませんでした。次の時間で彫りを終えて色ぬりにはいるようにしたいと思っています。 （担当教諭コメント・・・あと少しですね。あせると思うようにできなくなるので、落ち着いてね。彫りは丁寧に出来たね）
6	「失敗？」 最初につくった一版多色の作品の柿がトマトみたいになってしまいました。それは多分色の重ねすぎが、色画用紙が青だからじゃないかな？とおもいました。けれど、それを通じて2枚目は上手にできたと思います。 （担当教諭コメント・・・自分で原因を考えたこと、そしてそのことを生かしもう一度試していることがすばらしいね）	「あともうすこし」 今日の目標の色ぬり完成はできませんでした。でも、もう色をひまわりのすべての部分に塗りあとは調整です。それから花びらに赤を混ぜたのはひまわりがとても目立ってきれいでした。 （担当教諭コメント・・・自分のひまわりをもっとよく仕上げようと言う気持ちで、工夫も出ているんだね。効果的な使い方だとおもいますよ。）

検証授業3の考察

題材の設定（何を題材として取り上げるか）

今回は、生活画としての版画のみでなく、様々な版画の技法を試し、それを生かしたデザイン要素の含まれた題材に設定した。描く絵とは違って版の面白さや刷りで生じる偶然の美しさを感じることができることや、様々な技法があること、用途についても、絵画の作品としてだけでなく、はがきやしおり、絵本、カレンダーなどにも活用できることなど、版画の楽しさを感じ、学ばせることができた。（p.96 表1）

版画に対しても、アンケートをみると、学習前は「嫌い・どちらでもない14人」が学習後は、「どちらでもない2人」に減少している。（図4）

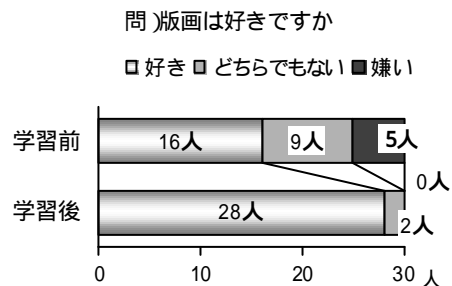


図4 版画についての意識アンケート

児童	学習前	学習後
イ	彫るのが大変だから。	大変だったけれど、上手に出来たものもあったから
ロ	× 絵を描くのが嫌だから版画も嫌い。	今回の勉強で、色々な種類の版画があった。僕はその一部しか出来なかったけれど、彫り込み法がきれいで気に入った。(面白い)
ハ	スタンプはいいけど彫りは苦手。	前は彫るのがいやだったけれど、今はそうでもありません。一つ一つの作品の良さ、そして技法を体験してとてもよかったです
ニ	あまりやっていないから楽しさがわからない。	自分で彫ったりするのが楽しいから好きです
ホ	難しいから	今回今までとは違うやり方を知ったから
ヘ	あまりやっていないから楽しさがわからない。	色々アイデアを重ねたりして面白いから
ト	× 人の顔がうまく彫れないから。	今回ステンシルをやって、ステンシルは1枚の型で色を変えたり、表現を変えることで、違うような作品が作り出せて、楽しかったから
チ	× 小さいところを失敗すると取り返しがつかないから。	一版多色で色が写らなかつたら悔しいと思い、次は絶対写すぞという気持ちになれて楽しいものだから
リ	彫りは好きだけど、下絵が嫌い。	彫りは好きだけど色をつけるのは、あまり好きではないから。(前よりは好きになった)
ヌ	好きなきも嫌いなきもあるから。	自分の思ったことが、もっと彫ることも出来るようになったし、彫り方も分かり、使い方と特徴もわかったから。
ル	× 失敗すると直すことができなくなるから。	最初は版画があまり好きではなかったけれど、木版を彫ると、色鉛筆やクレヨンでは出せないような木の温かさや優しさが出て好きになった。

(鑑賞や素材体験を取り入れた導入)

鑑賞を通して、日本の浮世絵についても興味をもつ子どももいて、発想・構想につながる情報のみならず、版画への興味・関心も高めることができた。

素材体験において、技能面でつまづかないように数種の手順表を準備したり、実演を見せ自分でも体験して学んでいくことができるように授業計画をした。自分で体験していくことから、なぜ自分の思うような色にならなかったのか、形や色の面白さなど様々な発見をすることができていた。

(「思い」をひき出し、制作を支える学習ノート)

今回、図5の生徒のアンケート結果を見ても、28人中26人が「役立った」と答え、残り2人は「どちらでもない」と答えるに留まった。このクラスは4月より図工の授業としてではないが、1日の終わりに「振り返りカード」を記入するようにしていることもあり、文章を書くことには抵抗がなく、スムーズにかつ効果的に活用ができた。子どもたちのアンケートを見ても、「その日のことを書くことで振り返ることができ、上手くい

問) 学習カードは役立ちましたか

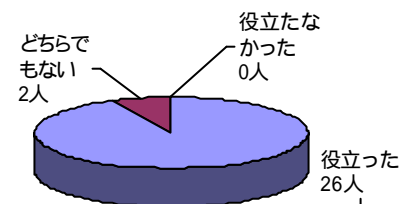


図5 授業後のアンケート

かなかったところが明確になる「カードがあったから次にどこを工夫すればいいか言葉を考えるから、よく考えることができた」「今どのくらい進んでいるかわかるのと、アイディアスケッチで書きたいイメージがほぼ決まった」「自分のイメージをメモして進められたので、スムーズにいきました」「振り返って悪いところなどを見直しすることができた」などの感想があった。学習ノートによって、子ども自身も、自分の作品や制作活動を振り返ることができ、教師も、子どもの思いに気づき、ひき出すことで、制作のアイディアを支え、見通しを持たせることができた。

？ 検証授業4 (「思い」をひき出す題材)

「あっ」という瞬間

中学3年(8時間)

= 題材に対する「思い」と、自分の表現活動への「思い」を探る =

(生活工芸品ではなく、生活の中の動きに着目した題材)

芯材と紙粘土を使った人体塑像で、日常生活の中で、「あっ」という瞬間的な人体の動きの面白さを感じるとともに、人体バランスの仕組みを理解





し、体感しながら作品を制作する題材である。

	着目児A	着目児B
子どもの日頃の様子 (担当教諭)	美術は好きで、美術部に所属。あまり話をしたりせずに、淡淡と活動していく。	どのようにしたらよいか悩んでしまいがちで、思いがまとまらない。
「思い」の視点	着目児A	着目児B
1) 題材をどのようにとらえるのか	「積み上げた箱を落としてしまいそうなとき」 ビデオ鑑賞(スケート場で走って追いかけるおまわりさん)から、動きの面白さに着目。	アイディアが出ずに友達と相談。 ビデオ鑑賞は柵に乗った子どもが柵に乗って壊れるところを選出した。
2) 何を表現したいのか・つくりたいのか	驚き・面白さ	驚き・指名手配犯を見つけたとき(感情的な驚き)
3) どのように表現するのか・つくるのか	変更して「頭が帽子から抜けなくなってさかさまになっている人」「太ったおじさん」「ちょっとドジな人」「シルクハットをかぶった人がひっくり返っているところ。逆立ちするのは大変ですか」「逆立ちは無理だから。いいよ、紙を逆さにして描くから」一度描いた足の部分を逆さにして描きなおす。	周りの友達の制作の様子を見ていて刺激を受け変更して サッカーボールを取ろうとする瞬間。 足元から針金を出し、空中のボールをつくる。
4) 満足のいく活動ができて いるか	制作の方向性がかめると自由に発想を広げ、洋服などの細かい造りやちょっとした細工までイメージをして、楽しみながら作品づくりをしている様子がよく伝わってくる。主体的に活動することができるようになった。	骨組みが折れてしまい、ちょうど授業も1日休んでしまい、作業が2時間分遅れてしまったが、教師の助言によって短時間で骨組みを修理して、何とか肉付けまでできるようになった。その後、テーマに悩んでいたが、友達から刺激を受け、ヒントを得て、イメージが固まってきた。

#### 検証授業4の考察

##### 思いをひき出す題材

日常生活の中で、ものや道具だけでなく、人体も表現活動の媒体となることに目を向け、あらゆる場が造形表現の手がかりになることに気付くことが、思いをひき出すきっかけになると考えた。そこで、瞬間の動きをとらえた人体表現を自分の体や、友達の体を使って表現できることに気付き、立体で表現する楽しさを味わう題材を取り上げた。

##### 鑑賞や素材体験を取り入れた導入

(導入時の鑑賞) 映画のビデオを使い、『「あっ」の瞬間』を子ども自身がビデオのなかから選んでみたり、写真集からプロのカメラマンがとらえた日常の瞬間を鑑賞し、人体の動きの面白さに気付くことで、発想・構想を広げていくと考えた。

(素材体験)【芯材の組み立て】針金の扱いにおいて、技能面とのかかわりが生じる。チューブを切る長さを「関節で切るんだよね」と友達と相談している。その後定規を当てて切っていく。パーツ付き芯材を使うことにより、立体のとらえを3次的に考えられ、スケッチに苦手意識があっても芯材で形を作ってからスケッチに戻ったり、人体バランスを見ると同時に、素材に触れてイメージを膨らませたりすることができた。



##### 「思い」をひき出し、制作を支える学習ノート

一枚形式のもので展開。毎時間簡単な授業の記録として、授業展開の確認、制作状況の確認が一目でき、思いの確認を通しながら、細部へのこだわりなどを見ることができた。また、教師の題材のねらいと子どものとらえのずれを見つけることにも役立った。しかし、既に記述に慣れてきている生徒にとっては書くスペースが狭く、メモ程度の記述にとどまり、思いを深めていく記述が難しかった。

思いをひき出すためには、何を学習ノートに記述させていくか、記述で表現する部分と、作品として表現していく部分とのバランス、子どもたちの状況に合わせた学習ノート、記述されたものに教師がどのようにかかわっていくかが重要であることがとらえられた。



## 研究のまとめ

本研究では、主題にある「子どもの思いを生かす表現活動をめざして」を具現化するために、子どもの「思い」を活動の流れに対応する4つの視点からとらえ、「思い」をひき出す題材」「鑑賞や素材体験を取り入れた導入」「思い」をひき出し、はぐくみ、制作を支える学習ノートの活用」の3つに着目し研究を行った。これは活動の原動力・推進力、発想・構想と技能の関係、自己評価、人からの評価を、「思いの成長（発展プロセス）」（p.90 図3）と関連づけながら授業を展開することを試みたものである。その中で明らかになった点は、次のことである。

思春期の子どもの表現活動に対する「思い」は、自分を客観的に見つめると同時に、他者からの評価を意識し始める。その中で、子ども自身が、自分の「思い」を表現することの価値を見出すために、教師の支援や友達、周りの環境とのかかわりを通して「思い」をひき出し、はぐくんでいく。そして、子どもが表現活動を通して自らの「思い」を実現し、その結果、満足感や達成感を感じるという経験の積み重ねが、自己理解や自己実現へとつながり、子どもが主体的な学習者として育つために重要なものとなっている。以下に、具体的な研究の成果と課題についてまとめておきたい。

### 1. 研究の成果

#### (1) 「思い」をひき出す題材

検証授業1・2では、直接生活の中で活用できるものを制作する題材を設定した。生活との結びつきの強い題材は、機能や用途がはっきりとしており、制作上の条件も明確なため、子どもたちも、何をどのように工夫し、つくろうとするのかをはっきり把握しやすいと考えたためである。その結果、子どもなりに自分の思いを確かめながら、制作することができた。

検証授業3・4は、生活の中で生かしていくことや、生活の中で出会う何気ない経験に目を向けることを重視した授業である。思いをひき出す手立てとして、検証授業3では、デザインの要素を強調するとともに、各自の目的に応じて多様な版画技法を選択できるようにした。また検証授業4では、誰もが体験したことのある「あっ」という瞬間をテーマとすることで、表現活動に対する思春期の子どもの興味・関心・意欲を喚起するように配慮した。身近な生活経験に着目させることで、活動に対する思いを効果的にひきだし、経験と結びつけながら発想を広げることで、愛着をもって制作に取り組むことができた。

以上のことから、生活の中で生かしていける活動や子どもの生活実感に基づく活動は、思春期の子どもの表現活動に対する「思い」をひき出す題材として、有効性が高いと思われる。

#### (2) 鑑賞や素材体験を取り入れた導入

表現や制作に対する子どもの思いをひき出し、明確にするための手立てとして、鑑賞や素材体験を取り入れた導入を工夫した。

鑑賞については、「クイズや投票形式を取り入れる」「作品の雰囲気に合わせて環境を整え、体感しながら鑑賞できるようにする」「生徒が鑑賞作品を選び、見つけ、参加できるようにする」などの工夫を試みた。子どもが自分の表現活動への「思い」をもてるよう、導入時の鑑賞によって関心を高め、制作に対する意欲付けにつなげようとしたものである。その結果、鑑賞は動機付け、意欲付けにも有効であり、また発想をひき出す刺激としても、効果的であることが明らかになった。しかし、鑑賞の仕方によっては、方向付けが強まりすぎることで、発想の広がりや妨げとなることもあるので、クラスの状態などを考慮した柔軟な展開が必要である。

素材体験に関しては、題材で必要となる素材を体験することによって、素材の特性や可能性を体験的に理解すること、うまい下手や成功失敗の観念にとらわれずに、発想・構想を広げる助けとすること、さらにまた、技能的な面でも、基礎的な技能の習熟につなげる機会としたいというねらいがあった。これらのねらいに関して、素材体験は効果があった。「失敗は成功のもと」と感じることができる子どももいれば、「本番では絶対に失敗したくない」と臆病になったり、失敗したことによって意欲が失われ、自信を無くす子どももいる。子どもにとって失敗とすることは、「思い」と技能面がうまく結びつかない点にあると考える。自信や意欲をなくすことを防ぎ、活動に対する「思い」を一層強め、確かなものにするためにも、思い通に表現することができるような環境を作ることが大切である。

### (3)「思い」をひき出し、はぐくみ、制作を支える学習ノートの活用

学習ノートの活用に関しては、検証授業3・4の考察からも明らかなように、子どもにとっては自分の制作状況を確認したり、振り返るための手立てとして有効であり、教師にとっては子どもの思いを見取ったり、教師のねらいと子どもの受け止め方とのずれを把握するための手立てとして、有効であることがとらえられた。しかし、制作の軌跡を自ら確認していくことができるような学習ノートは、思いをひき出し、制作を支えることに効果的に働くが、感想を書くだけのものや、文章を書く比重が多いものは子どもにとって苦痛なものになってしまう。子どもの状況に合った学習ノートの形式を検討する必要がある。学習ノートの活用を積み重ねながら、段階を経て自分の思いを作品とともに文章を添えた表現へとつなげていけるよう無理のない指導が必要である。簡単なスケッチやメモでも、書き留めておくことにより、自己の学びのふりかえりができる。自己実現を図るための学習ノートになるよう、教師の指導や評価と共に、自己の変容を自覚できるように、学習ノートの各項目を構成する必要がある。

=学習ノートに最低必要と思われる項目=	
学習のねらい・目標	教師側がその題材で身に付けてほしいこと、ねらいを明確に提示する。何を学ぼうとしている学習なのかを明確にしておく。
自分のねらい・目標	子ども自身が、この題材で身に付けたい、深めていきたいと思っていることを記しておく。
学習の計画	学習に見通しをもって行えるようにする。 (授業の進行予定) 制作状況を確認しながら次回に向けて計画性を持って取り組む。
授業ごとの自分のコメント	その授業で、疑問に思ったこと、問題点、発見したこと、感じたことなど、様々な思いを記録しておく。
自己評価	自分自身を振り返り、評価していく。自分の変化・成長を自分で見つめていく。
指導者からのコメント	授業時間に見とれなかった部分も含めて子どもへの支援、励まし、認める言葉、評価など、個々に伝えたいことを書く。
作品へのコメント	自分の作品にかけた思いや、制作意図を記す。自己理解を深めていく。
友達の作品へのコメント	友達のよさや、自分と異なる表現を認め、理解していく。

#### \* 学習ノートの形式 \*

	一枚形式 検証授業1・4	数ページ・冊子形式 検証授業2・3	列ア・ファイル形式	スケッチブック自由形
メリット	一目で、学習の状況が分かる。指導者も確認しやすい。	思いを十分に記録しておける。学習の記録としての冊子になる。(作品や友達の感想なども添付できる)	紛失が少なく保存がよい。写真や小さな作品ならそのまま保存しておける。資料なども順次ストックしておくことができる。	形式にとらわれず自由に書き込むことができる。スケッチや計画も描いたり、貼っていくなどして構図も、自由が利く。
デメリット	限られたスペースで、思いを書ききれない(簡単に済ましてしまう傾向がある。)	文章を書くのになれていない子どもには負担が大きい。	整理の時間が必要。自分の軌跡となるような記述や計画を用意しておく必要がある。	はじめてだと、何をどのように記入したらよいか理解できない場合がある。また、紙面を整理して書いていくことなども、慣れていないと難しいと思われる。

## 2. 今後の課題

表現活動への「思い」を子ども自身が自覚し、はぐくみ、表現を通して具体化することは、表現活動への意欲を一層高めるとともに、表現活動に対する喜びや自信をもたらすことが見えてきた。

本研究では、検証のために4つの授業を計画、実施したが、今後、より広い範囲で「子どもの思い

を生かす表現活動」を実現するために、以下のような課題が残っている。

年間を通して、さらに6年間又は3年間の図画工作・美術科教育を通して、子どもの「思い」を十分に生かすためのカリキュラムの在り方を検討すること。

子どもの表現活動の「思い」をひき出し、はぐくみ、支えていくために、クラスの状況や発達段階に即した、より柔軟かつ適切な指導の在り方を検討すること。

心象表現を含めた全ての表現活動において、思春期の子どもの思いをひきだし、はぐくむための指導法を検討すること。

以上のような課題の追求を通して、子どもが自分の「思い」を思い通り表現でき、他者に認めてもらうことにより、制作に自信と満足感を感じられるようにするとともに、制作を通して自他を認め合う中で、互いの存在を確認し合い、自己実現を図り、生きる力を身に付けることができるように、一層の研鑽に努めたい。

教師は、子どもが主体的に活動できる環境としての授業を築かなくてはならない。子どものもっている可能性を伸ばし、自信をもって生きていく力を育むための指導を心がけ、「子どもの思い」を生かした研究を今後も深めていきたい。

最後に、研究を進めるにあたりご多忙中にもかかわらず、適切なご指導・ご助言をいただきました先生方、そして、この研究を支援して下さいました研修員所属の学校の校長先生はじめ、教職員の皆様に心より感謝し厚く御礼申し上げます。

#### 【参考文献】

- |  |       |
|--|-------|
| 新井哲夫編著『中学校美術 授業作りの基礎基本』日本文教出版            | 1998年 |
| 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』文部省                   | 1999年 |
| 『中学校学習指導要領解説 美術編』文部省                     | 1999年 |
| 若元澄男編集『図画工作・美術科重要用語300の基礎知識』明治図書         | 2000年 |
| 宮脇理編集『美術科教育の基礎知識』建帛社                     | 2001年 |
| 遠藤友麗編著『改訂 中学校学習指導要領の展開 美術編』明治図書          | 2001年 |
| 遠藤友麗編著『新しい時代の学力づくり授業づくり中学校美術科編 A 表現』明治図書 | 2002年 |
| 板良敷敏編著『新しい教育課程の展開 小学校図画工作科』東洋館出版         | 2002年 |
| 東山明監修『中学校美術科ワークショップ3イメージと発想の展開編』明治図書     | 2002年 |
| 『新版 造形教育実践全集』日本教育図書センター                  | 2002年 |

#### 【指導助言者】

- |                                |        |
|--------------------------------|--------|
| 群馬大学教授                         | 新井 哲夫  |
| 京都造形芸術大学教授                     | 井田 彪   |
| 川崎市立小学校図画工作科研究会長（川崎市立藤崎小学校長）   | 長瀬 克則  |
| 川崎市立中学校教育研究会美術科部会長（川崎市立住吉中学校長） | 設楽 百合子 |
| 川崎市教育委員会学校教育部指導主事              | 金井 則夫  |
| 川崎市総合教育センター研修指導主事              | 行川 博幸  |